

高等学校3年間の国語「現代文」の授業 その2

一学習者はどのようにうけとめたか その2 授業での出会いについて一

金本 宣保

学習とはどういうものかを自覚する時、学習者は、一段高い段階の「分かる」ことに到達する。高等学校の現代文の授業で、学習者が現代文の学習とはどういうものであると考えようになったか、生徒の作文からまとめた。「研究紀要第41巻」の「学校3年間の国語『現代文』の授業 — 学習者はどのようにうけとめたか その1」で「『作文の授業』について」に続き、「その2」学習者が授業でどのように出会ったかをまとめたものである。学習の方法について述べた生徒の作文は国語の授業のあり方を改めて考えさせ、授業の教材を中心に述べたものは優れた文章の力を再認識させるものであった。

1. 全体 なにについて書いたか

作文の提出数174。在籍生徒数198。

教材の文章の題材別からまとめる。

中1	宮沢賢治「オツベルと象」と谷川俊太郎の詩	18
高1	大岡信 「ことばの力」	6
	芥川龍之介「羅生門」	6
	志賀直哉 「城の崎にて」	11
	川田順造 「手作り幻想」	2
高2	河合隼雄 「心の鉱脈」	2
	中島敦 「山月記」	25
	夏目漱石 「こころ」	19
	「キーワードで読む現代評論」	3
高3	村上陽一郎「知識活動における秩序と混沌」	2
	森鷗外 「舞姫」	19
	小林秀雄 「無常ということ」他	30
その他（書いた生徒が1名のもの）		8
授業で取り上げなかった作品		（注1）8

注1 1名が2作品以上あげている場合もあり、延べの数である。

当校は中高一貫教育の学校で、指導者はこの学年を中学校1年の時、国語の授業を担当したので、その時のことを書いた生徒もいた。

「キーワードで読む現代評論」は当校国語の教官竹盛浩二著のテキスト。

2 授業の方法について

生徒 a

僕は4年（注2）の時、模試の現代文の点がすごく悪かったので、先生のところへ行きました。「先生どうすれば力がつくのでしょうか。」と聞くと、「君は、授業中いつも眠たくなってますよね。」と言われ、やっぱりバレていたのかと笑ってしまった。「授業中常に考えていれば眠たくなならない。自分で考えて話について行ければ眠

たくなならない。そうやってまず授業についてくるのが大事だ。」と言われ、それを実行することにしました。常に先生が何を答えさせようとしているか考えると、なるほど確かに眠たくなならない。それからというもの、僕は先生の授業で寝ていたことはほとんどありません。最近国語は上がったなあと思います。先生の授業は（ついて行ければ）とても楽しかったです。

注2

中高一貫教育の当校は高1を4年、高2を5年、高3を5年としている。

指導者のこたえ

「実行できたことがエライ。

相談を受けた時、この生徒はできるはずだと思っていました。」

生徒 b

授業中に先生に当てられるが一番緊張する瞬間でした。それは、先生の質問する内容がはっきりと理解しづらかったからです。ある他の先生にそのことを話したら「金本先生の質問を理解することが国語力アップの秘訣じゃ。」と言われました。たしかにその通りで、それで十分鍛えられたと思います。定期テストのときもなんとか金本先生の思考やフィーリングに合わせて解答しようと努めました。授業で扱った教材は難しいものが多かったですが、キーワードも抜き出したり、○×の表にしたり簡略化された先生独自の板書の仕方も大いに参考になりました。

指導者のこたえ

「その先生、いいことを言ってくれました。

先生が分かるのが、その教科の勉強であり、伸びていく一つの方法だと思います。」

生徒 c

常識やぶりだった。僕の国語の先生という一般的なイメージとして「妙に字がきれい。」「黒板が妙にきれいにまとまっている。」という固定観念があった。だが、この15年にもわたる概念の蓄積は一瞬でうちくだかれた。正直「なに?!」の一言だった。「授業がわからん。」4年当初、よく知り合いの先輩に相談した。「そのうち分かるようになるよ。分かるようになったらかわいいし、楽しいよ。」いつも返ってくる答えはこれだった。あれからもう3年がすぎようとしている。さて、いつからだったのだろうか？いつのまにか授業が分かるようになった。僕が国語ができるようになったのか、それとも慣れただけなのか、いまだにこの答えは明らかではない。僕は普通の模試の国語はあまりよろしくない。しかし、先生のテストはなぜか点が取れる。とりあえず、僕が先生と気が合うこと、そして、後輩に「国語の授業がわからん。」と聞かれたら、先輩と同じことを言うだろうということとは確かだ。

指導者のこたえ

「国語の力がついたのです。

後輩によく言ってください。後輩のために、私のために。」

考察

自分では分かりやすい授業展開をと考えているつもりであるが、なかなかうまくいかない。かなり授業を受けて理解してもらえるようになる。最後までよく分からないと思う者もいるだろう。

国語の学習では考えることが大事なのだが、なにを考えるかという課題がはじめてから見えている学習もあるが、現代文の学習ではそういうことは少ない。課題を自分で見つける力を養うことをめざしている。だから、学習者に分かりにくい。自分で課題を見つけていくという考え方を理解させ、その力を養う。授業の中ではやく身に着けさせたい。

3. 授業中の態度について

生徒 d 部分

私が現代文で一番印象に残っているのは四年生のとき。「考えてまとめてみなさい」と先生が時間を与えた後に当てられて、「質問が分かりません」と答えたら、それまで笑顔だった先生が一変して「なにー」と一言。先生が怒るのはめずらしかったので、クラスがシーンとなり、当てられた私もどうしていいか分からず、とまどった。今でも、もと四年E組の友人と話すことがあるく

らい印象的だ。

指導者のこたえ

「そんなことがあったなあと思い出しました。○○さんだったんですね。」

生徒 e

4年生ぐらいのとき、クラスの男子が休けい中に将棋をしていて先生が教室に入ってきたとき、その将棋盤にそのままにしてあった駒を「くずしなさい」と普段はあまり強く言わない先生がそのときはきびしく言われた。先生がおっしゃるには、将棋の駒をそのままにしていると授業中もどこかでそのことを考えてしまい授業に身が入らないからというのでした。その当時は、自分は細かいことを言うなあと思い出しましたが、2年経ってみて、そして自分が受験という山に向かってみて、そういう一見したいしたことのないようなことが実はすごく大切で、なかなか難しいことが分かりました。

指導者のこたえ

「残念ながら、みんな今ごろ分かるのです。しかし、それが分かっただけでもエラクなった。」

考察

学習者に授業中は学ぶことに集中してもらいたい。

4. 絵について

生徒 f

何年生の時か忘れたけれど「山月記」の授業で、「豊頼の美少年」が「容貌峭刻」となったという部分を読んだ時に、先生が黒板に描いた李徴の顔の変化図がすごく大人気だったことが一番記憶に残っています。それ以来、図書館で「山月記」を見かける度にあのすごい顔を思い出してしまいます。

指導者のこたえ

「おそらく、君の中で『絵』とともに『山月記』は、成長しているのだと思います。」

生徒 g

一番記憶に残っているといえば「舞姫」か「山月記」です。「山月記」のとき先生がお描きになった風景の絵がキレイだったというのをなんとなく覚えています。先生は授業でいろんな絵をお描ききになります。具体的なモノを描くときより風景や場の雰囲気を描写したとき

のほうがうまいと思います。

これからもどんどんかいてください。

指導者のこたえ

「私は雰囲気を描きたかったので、こう受けとめてもらえて、うれしい。」

生徒 h

一番印象に残っていることという先生が黒板にかかれた絵です。文章の背景の時もあったが、私が特に感動したのは難解な論説文までが「カカッ」という音と共に、図に変化してしまったことです。難しい抽象的な言葉が図になった時、国語にはいろいろな方向から取り組むことができることを知りました。先生のかく絵には、人を和ませるパワーもあるような気がします。

「現国」というと私にとっては「金本先生」です。

指導者のこたえ

「言葉を図にするとき、少し（いや、だいぶ）単純化があるので、ちょっと。しかし、『人を和ませるパワー』があるなら、やらなくては、と思います。」

考察

よく授業で絵を描く。思いついてという時もあるが、授業計画にはいつている時が多い。前のクラスで描いたと聞き描くのを待っていたと書いた生徒もいた。

5. 「ことばの力」 最初の「高等学校現代文」の学習

生徒 i

昔のことはあまり覚えていないんだけど、現代文の最初の授業のことは印象に残っている。作文を「ことばとはなにか。」とかいった題で書いたと思う。自分はいろいろ悩んだ末、つまらない文章を書いた。提出した次の授業で、その作文の発表があって、上手な人の文章を聞いてこの人たちってすごいなあと思った。そのことも記憶に残っているのだけど、さらに印象に残っているのはその後で先生は「ことばが道具という考えは今はない。」と言ったことだ。自分は思いきり「ことばは道具」と書いていたのだから印象に残っているのだろう。

指導者のこたえ

「それを覚えていることも大切です。」

生徒 j 部分

現代文のテストで、私は書いてあることをそのまま問にあてはめるというやり方で解いていたけれど、高校に

入学して初めての現代文のテストで中学の時といっしょだと甘く考えていた私にとって「氷山の一角」を図示せよという問にびっくりした。私は今まで文章の文字を追っていただけで読んでいなかったんだなあと思った。それ以後、多分文章に対しては中学校の時とは違う読み方をするようになった気がします。

指導者のこたえ

「『氷山の一角』そんなのもあったなあ。こう受けとってもらい、うれしく思います。」

生徒 k

四年生の初めての作文の時「ことばとは」というテーマで書かされたことを思い出します。ぼくが書いた内容は「言葉は火である。」というものでした。人の心を暖めることもある、怒りの炎を起こすこともあるという内容だったと思います。後でクラスの前でこの作文を読むように言われました。読み終わった後みんなが拍手してくれて先生が褒めて下さったことが、強く印象に残っています。当時、自分は理系に進むつもりでした。しかし五年生になって文系に進むことを決めた時、不安になった心を支える経験となりました。三年間良い先生に恵まれたことを感謝しています。ありがとうございます。

指導者のこたえ

「そこまでになったことを重く考えます。」

6. 小説を味わう

志賀直哉「城の崎にて」

生徒 l

「城の崎にて」で、石垣にへばりついているねずみに周囲の人が石をなげつけているところを目撃した箇所。人の残酷さが描写されていると思っていたが、先生の説明では石を投げている人が笑っているのは楽しいからではないということだった。その時の先生の「ひきつった笑い」という表現が興味深かった。文学は奥が深いと考えた。

指導者のこたえ

「『ひきつった笑い』と言ったのですか。よく覚えていますね。そうだったのかと思っています。」

生徒 m 部分

「城の崎にて」のこと

私はこの話を読んで志賀直哉の文章が好きな気がしました。なぜ好きなのかよく分かりませんが、授業を受け

た後、言葉の使い方の細かい部分が見えてきて、更に志賀直哉のものの感じ方が見えてきた気がします。その後誰だったか忘れましたが、ある作家が「城の崎にて」についてなぜイモリは「いい」色をしていたのか「美しい」ではないのか、しきりに悩んでいたようですが、私が志賀直哉を気に入ったのは、彼がそこで「いい」色だと言ったからだと思います。

指導者のこたえ
「いい。」

生徒 n 部分
芥川龍之介「羅生門」や志賀直哉「城の崎にて」といった小説の授業を覚えている。と言ってもストーリーの展開や心情ではなく断片的な映像です。「羅生門」では、暗いはしごに登る男の姿や、上でたいまつを持ち死人をあさっている老婆の姿が、「城の崎にて」では、串にさされたねずみの姿や、静かな蜂の姿が写真のように記憶されています。先生の授業は黒板に描かれる絵がとても印象的でした。小林秀雄ではありませんが、絵が分かったような気がします。

指導者のこたえ
「『断片』こそ心—身体の中に生きているものです。」

7. 文章と自分とが重なるとき

河合隼雄「心の鉦脈」

生徒 o 部分

河合隼雄さんの本から数テーマ取り上げてプリントで学習しました。あの教材が一番印象に残っている理由は、私はよく人のことを気にし過ぎたり、他人と比較して自己嫌悪に陥ることが多いので、河合さんの文章を読んで、心が救われるというか、心が軽くなる気がしたからです。

森鷗外「サフラン」

生徒 p 部分

私が「サフラン」を気に入ったのは、この作品中に私自身を投影することができたからです。鷗外は自分は名を知って物を知らぬと言います。私自身もそうです。名ばかり知って物を知りませ。鉛筆一本すら、私には作れません。私がこの作品に共感するきっかけとなった思い出があるのですが、それは鷗外とは少し異なります。

小さいころ、父が外国からサフランを買って帰りました。御飯に色をつける、あのサフランです。その御飯を食べながら、私は「サフラン」というどこか不思議な雰囲気を持った名前と、目の前にあるサフランの御飯の

色・形が不可分のものであると認識していく自分を感じました。この私の思い出と、鷗外が街でサフランの花に出会ったというこの作品の内容とが重なり、この作品を身近に感じました。そして、この作品において初めて自分の持っている能力・精神のすべてと作品とを結びつけるすべを手に入れたのだと思います。

指導者のこたえ

「勉強・学問は抽象的な世界を広げ高めていくことで、それは大事なことです。自分の生活（この語の定義も実に難しいのですが）とつながって『理解』された時、また、別の世界が開かれてくるのでしょうか」

夏目漱石「こころ」

生徒 q

僕が3年間の現代文で一番記憶に残っているのは「こころ」の中でのKの自殺でした。主人公の利己心で自殺におこまれてしまう様子が、今現在、勉強していて自分のことばかり考えてしまっている時に、頭をよぎることがある。友人の中にも、ノイローゼ気味の人もいるが、最後にはみんなで気持ちよく卒業したいという気持ちにもさせてくれる。読んだ当時の重いだけの雰囲気以上のものを思い、「こころ」が教科書にのっている理由もわかる気がする。

指導者のこたえ

「読みとりも深いし、君の受けとめ方（実は、読んだ後、深まっていくものもある。）は、とてもいい。」

考察

なかなかないことだが、文章と自分の生きることが直接重ねられて考えられ、なるほどと納得することがある。その時、文章が思考だけで書かれたものではなく、生きることから生まれたものと分かる。文章と直接対応する自分の経験を見つけることを、授業で教室の全生徒に求めるわけではない。が、思い当たる経験が浮かびそれを通して理解するということが起きることも予想される。授業では、あるときは期待し、あるときは怖れていなくてはならない。

p は作文の最後の部分に「もう一つは補習での『サフラン』です。国語が分かり始めたははじめです。」とあった。指導者が「具体的に聞いてみたいと思います。」と書いたのに対して書かれたものである。

q は作文を書いた時は、卒業直前であるが、センター試験・大学入学試験直前でもあった。そういう時、作品の世界から自分を見る。「最後にはみんな気持ちよく

卒業したいという気持ちにもさせてくれる。」と、危機の中での希望を述べている。

8. 小林秀雄「無常ということ」 授業者の話

生徒 r

先生が先生の子の話をしてくれたことが印象深く残っています。先生の子が遊具から落ちて吐くようになり、病院にいったとしても原因がわからない。そんな場面を自分にあてはめて考えてみようとするとうたまらない気持ちになりました。手術も成功して元気になったことを話す先生はとてもうれしそうでした。

親の存在というものを改めて考え、ありがたく思いましたが、やっぱり「いるのがあたりまえ」になってしまっているの、よくわがままをいい、反抗もしてしまいます。

指導者のこたえ

「自分のこととして受けとめてもらえて、うれしく思います。」

生徒 s

金本先生が子どもの話をなさったことが三年間で一番心に残りました。あの時はみんな静かに、普段は眠っているような人でも、聴き入っていたとおもいます。僕を含めた理系の人たちはつつい国語というものを過小評価して『センター試験の足かせ』なんて考えがちになりますが、あの時は国語の主題の一つは心のあり方であるということを再認識させられました。僕の進路は理系のバリバリのところですが、あの時の授業で確認させられたように、人の心を考えて、数式やら記号やらを追いかける人になりたいです。

指導者のこたえ

「理系の人にもそう思ってもらえ、うれしいです。」

生徒 t

先生が、子どもの話をしてくださったのが印象に残っています。決して笑える話ではないのに、みんなにとってもウケていて、おもしろかったです。いつもは文章にそってのまじめな授業ですが、余談が興味深く、特に先生のこどもの話は印象的でした。でも、どの授業だったのか、その話のイメージが強くてかんじんの本題が思い出せません…。

指導者のこたえ

「なんで笑ってもらったのか、今でも分かりません。」

自分でも、もう2度とできない授業です。」

考察

3年間の授業の最後の単元が小林秀雄の文章であったのでそれについて述べたものは多かったが、解説のためにした指導者の話について書いたものをまとめた。

同じ話をしてある教室では爆笑となり、ある教室ではしんとなった。教室の爆笑の話は他のクラスの何人かの生徒に伝わったのだが、笑いとは逆の雰囲気となり、どうして前の組の人は笑ったのかときいてくる生徒がいた。「どうしてか分からん。」と答えたが、今でもよく分からない。rとtの生徒は同じクラスであるから同じ話をきき笑いながらrのように思う生徒もいた。

今度授業するとしても、しんみりさせることはできないだろうが、あの話であれだけ笑ってもらうことはできない。あの時は授業の始まる前から生徒と今の生活について話していて、指導者と教室の生徒とが親密な空気になっていた。私は家族にでも話すような調子で語った。おそれあわてている姿は滑稽でもあった。笑われて、授業が終わった後まで愉快だった。

子どもの話について書かれたもので指導者を驚かせたものがあつた。いろいろな授業の場面について述べた終わりにこう書いていた。

生徒 u 部分

最後になりましたが、先生のお話にあった外科医は、多分僕の父だと思っています。

指導者のこたえ

「おどろきました。今回の作文で、一番驚きました。妻に伝えました。娘にも伝えます。お父さんによろしく。有り難うございましたと申したいと。」

授業で話した時、また、小林秀雄の授業のまとめの作文の時、生徒はまったくそのことにふれることはなかった。3年間の授業の最後の時間に書いてくれた。もし、この時作文を書かせていなかったらいつまでも私は知ることはなかっただろう。uの父である医師が娘を手術したのは二十数年前で、その医師が外国へ留学してからは便りもしなくなっていた。

高等学校3年生で現代文の時間に小林秀雄の授業をするたびに話してきたことだが、こういうことがあるとは予想していなかった。

9. 取り上げなかった教材

授業で扱わなかった文章について書いた生徒がいた。

生徒 v 部分

授業でやらなかけど、「路上」これはすごくやりたかった。中原中也の詩も好きです

指導者のこたえ

「『路上』はいい作品だけど、マイナーなのです。」

生徒 w 部分

「怖れ」をやらなかったのが少し残念です。「汚れちまった悲しみに」も好きです。

指導者のこたえ

「教材以外で好きなものがあるのがいい。」

生徒 x

「こころ」がよかった。人間関係における苦悩は読んでいて面白い。

一つ残念だったのは「ベルツの日記」を授業で扱っていないことだ。自分で読んでみたが、非常に感動した。これから大学に行くであろう我々にとっても少なからず参考になると思った。

指導者のこたえ

「『ベルツの日記』を自分で読み、価値を見いだしているのはエライ。」

考察

自分で読んで好きな文章を授業で扱ってもらいたいと思われるのは、国語教育の指導者としてありがたいことだ。生徒 w は指導者のこたえに対しさらに「とりあえず教科書のものを書きましたが、個人的にはエンデのシリーズが好きです」と書き加えてきた。

梶井基次郎や中原中也をとというのはよくありそうだ。「ベルツの日記」を扱ってほしいという生徒があるとは予想していなかった。時間の上から扱わなかったが夏目漱石の文明論と関連させて授業をしてみたいと思っただけに、「こころ」を面白いという生徒がこれに「非常に感動した」というのは興味深い。

むすび

学習者は同じ授業を受けながら、受けとめたものはそれぞれ違う。しかし、「分かる」ことを経験させるためには、学習者の全体が、思考して分からなくてはならない。作文の時間で必死に書いているとき生徒はそれぞれ

首をかしげたり、膝を揺すったり、自分の癖が出てくる。頭と手先だけでなく、全身で書く。そういう場から個性が生まれる。

四歳の女の子を公園に連れて行って遊ばせた。子どもがボールを蹴ろうと身構える。子どもに向かっところをしたボールをじっと見つめ、前かがみの体をゆらし少し進んで、息を止め全身で蹴る。ボールはころがる、子どもはけらけらと笑っている。

なぜ、笑うのか。緊張ー達成ー笑い。子どもはボールと出会ったのだ。緊張し全身で学ぶ場面が授業にあればよいと思う。